

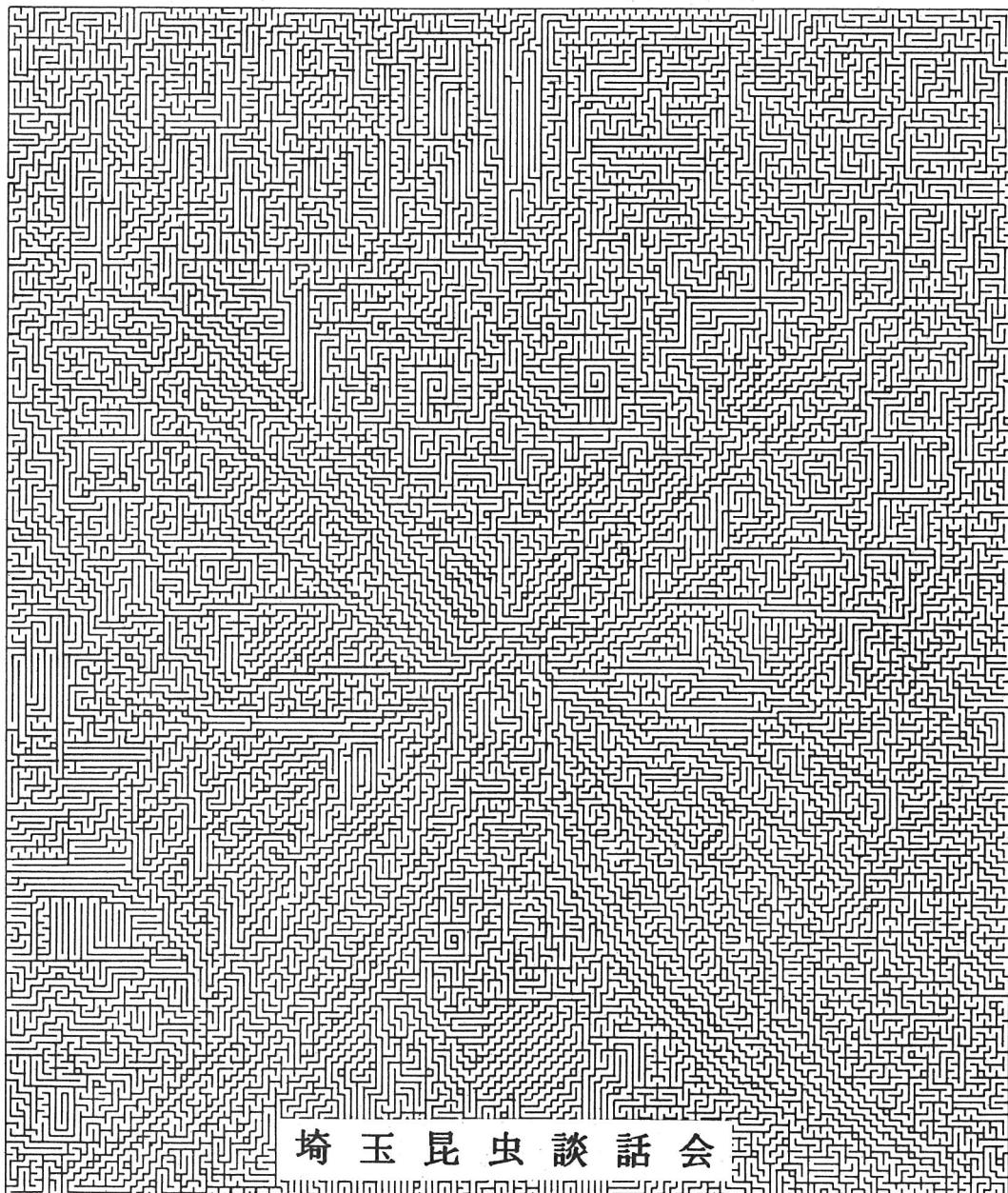
1993年3月28日 発行

ISSN 0917-5695

寄せ蛾記



YOSEGAKI № 67



表紙の遊びかた・・・「表紙のことば」にかえて

今回の表紙は趣向を変えてみました。先ず、入口を探して下さい。
そこから鉛筆で通路に沿って進んでください。さて、何が浮かび上
がってくるでしょうか。

表紙を汚したくない方は、一度コピーを取って、挑戦してください。

製作者

.....

武蔵野の雑木林の衰退と蝶の変遷(5)

石塚祺法

.....

第二部『武蔵野に逞しく生きる蝶達』

第一部で武蔵野の現状—悲劇的な潰滅状態の様をレポートした。

多くの蝶は武蔵野の雑木林の消滅と運命を共にした事は事実である。武蔵野の片隅に辛うじて生き抜いている蝶達の生活のほんの一部を紹介したに過ぎない。

安否が不明の蝶もいるが、何よりも嬉しい事は織田氏の『武蔵野の蝶』より50年の歳月が流れ、その間、環境は最悪の状態にまで劣化したにも拘わらず、多くの蝶は武蔵野のどこかで、しっかりと生活して生き延びている姿を確認した時、涙がでる程嬉しかったのを覚えている。

蝶達は私達が考える程、弱い生物ではないのだ。あの小さな生物にこれだけの逞しさがあろうとは、想像を絶する思いである。劣悪な環境にもかかわらず、しっかりと生きている彼女達に拍手を送ろう。そして、今後も彼女達が安心して生活が出来るよう見守っていこう。

× × × × × × × × × ×

第一部は私自身、少年時代の感傷を重視してきたレポートであると自認している。その是非は別として、武蔵野に生まれ育った私自身の自伝的なレポートであったのである。

これから語ろうとする物語りは、そんな感傷的なものではない。蝶達の逞しい生活の姿を描こうと思う。ただ、残念なことは、これらの蝶達は少数派である。少数派であろうと潰滅された武蔵野に勢力を増大している逞しい蝶達なのである。何の保護もなしに荒廃した環境に適応して、勢力を伸ばしていく素晴らしい仲間達である。そして、いかなる環境の変化にも拘わらず、昔と同様に勢力を維持している仲間達も又多いのも事実である。

武蔵野という広大な台地は、その時代によって、様々に姿を変えてきた。潰滅的打撃を受けた地域も多い。自然の営みの一つともいえるけれど、いずれは元に戻るものである。アスファルトジャングルは元に戻ることは決してないだろう。そのアスファルトジャングルの中でも生活している蝶も少なからず存在するのである。そのような大局的視野でみれば、武蔵野の現状はまだ絶望的ではないのかもしれない。まだ、自然の復元力が可能の状態なのである。

それもこれも私達、人間次第なのである。公園を造れば自然が安泰であるという程、単純なものではないが、その内容次第では虫達の楽園はある程度復活する可能性はある。人間達の為の公園では駄目なのである。これは蝶達の世界からの切なる要望もあるのだ。

『武藏野で逞しく生活する蝶』

その1 アサマイチモンジ

この中型のタテハチョウは武藏野の平地林では稀な蝶であったと記憶している。目につくのは同型のイチモンジチョウでこの蝶が雑木林を占有していた。林縁部で見掛けるのは、大部分がイチモンジチョウであり、今日でもそれは変わらない。

しかし、アサマイチモンジは当時は殆ど姿を見ることはなかった。両種は極めて似た斑紋を持っているので、余程蝶に精通した人でなければ区別がつかない。少年時代の私はどうだったかといえば、このアサマイチモンジに執着していたので、当然、両種の区別はできた。アサマイチモンジのアサマ（浅間）という名前が好きだったから、きっと山の蝶であろう。平地のイチモンジチョウとは格が違うと思い込んでいた。だから必死でアサマイチモンジを求めていたのである。

この蝶が平地の浦和市に棲息していると聞いたことがある。しかし、必死の努力にもかかわらず採れるのはイチモンジチョウばかりであった。

私がアサマイチモンジを採集したのは、1968年6月に山梨県韮崎で採集したのが最初であったと思う。その後、各地で少数の個体を採集しているが、相変わらず山の蝶のイメージそのものであった。

この山の蝶が何と私の住む大宮の団地の庭で発見したのである。たしか1980年の事である。少年時代、あれほど憧れ、求めていた蝶が自宅の庭にきていたのだ。小学生の次男が夏休みの宿題で蝶を採集した中に混じっていたとき、正直いって戦慄が走ったのを今でも忘れない。

その後、浦和市の荒川の河川敷き（現在の秋ヶ瀬公園）に何年振りかでネットをもって出かけ、アサマイチモンジを採集したのである。意外なことに、ここではアサマイチモンジの方が多かった。30年前はここでは影も形も見えなかつた（私だけかもしれないが）のに、この有様はいつたい何だろう。

当時、稀であったアサマイチモンジがどこにでもいる。こんな馬鹿な事があるのであろうか。当時は真剣にそう思った。

この蝶は大宮台地のみならず、武藏野全般に確実に勢力を増大しているのだ。平地の中型タテハチョウの代表格にまでのし上がってきたといったらいさか誇張かもしれないが、現在は平地の普通種になっている。勿論、イチモンジチョウもその地位はゆらいではない。やはり、個体数ではイチモンジチョウが勝るのは致し方ないが、武藏野で確実に勢力をましたのは、アサマイチモンジであると確信している。

アサマイチモンジの調査記録

1980-8-29	1♂	大宮市奈良町
1980-9-15	1♂	浦和市秋ヶ瀬 目撃 数頭
1982-7-4	1♂	同上
1984-9-24	2♂	吉見町市野川
1986-9-23	1♂ 1♀	同上 目撃 数頭
1988-10-1	1♂	同上 目撃 数頭(汚染個体)

1988-7-23	1♂ 1♀	吉見町大沼
1989-7-22	1♂	吉見町日吉神社
1989-7-30	2♂	吉見町和名沼
1989-8-9	1♀	同上
1990-7-30	3♂	高根cc 目撃 数頭

その2 ウラギンシジミ

この蝶は本来は南方系の蝶である。以前、武蔵野には全く棲息していなかった蝶ではなかったようだ。織田氏のリストにも記載されているし、私も1966年、武蔵野ではないが、東京都の高尾山の林道で、秋に採集している経験がある。

夏から秋にかけて、暖地から北上してくるのであろう。従って、武蔵野で定着して生活していた蝶ではない。

私が九州福岡に転勤したのが、1970年である。8月に転勤したので、近郊の林に行くと、いつもウラギンシジミの銀色の美しい姿が見られ、夢中でこの普通種を採集したものであった。裏面の単純な銀色の色彩が何とも美しく、こんなに美しい裏面を持った蝶が世の中に存在するのが不思議であった。単純な造形の美というものなのだろう。裏面の美しい色彩に対して、表面の色彩は実に冴えない。黒地にオレンジ紋がぼおっと配列されているのがオスで、オレンジ紋の代わりに鈍い銀紋があるのがメスで、どちらも表面は締まらない表情をしている。

余談だが、1988年1月にシンガポールに旅したことがあった。この時、セントーサ島で採集したウラギンシジミの親戚は表面のオレンジ色がとても鮮やかで締まりのある表情を持っていてとても印象的であった。

この南国産のウラギンシジミが最近、武蔵野に住み棲みついたようなのである。それがいつ頃の事か明確には解らないが、どうも1970年代の後半か1980年代にかけてのようである。多くの蝶が武蔵野から姿を消しつつある今日、この蝶は逆に武蔵野の住人となり、市街地でも姿がみられる位、勢力がましてきたのである。

南国産の蝶は秋によく姿を見せるることはあっても越冬は困難である。しかし、この蝶は武蔵野での越冬は確認されているし、年々、調査件数も増加している。

難しい話はこの位にして、私とウラギンシジミとのかかわりについて、若干触れてみよう。

私とウラギンシジミとの武蔵野での出会いは1983年9月23日、子供と吉見の百穴に遊びに行ったとき、ウラギンシジミがそこここに舞っていたのに驚いてネットにいれたのが最初である。しかも、吉見からの帰宅後、自宅の近くで再びウラギンシジミと出会い、あわててネットインした個体が子供の標本箱に収まっている。

その後、ウラギンシジミは自宅周辺では、毎年姿をみており、武蔵野に定着している事は間違いない。この蝶は定着は別として、武蔵野を越え、更に北上している。いつだったか覚えていないが、栃木県

のゴルフ場で陽だまりにウラギンシジミが群がっているのを目撃した事も度々あり、武蔵野を越え、生活の場を更に拡大していく事も十分に考えられる。

とにかく、この蝶の生命力、逞しさには脱帽である。一説によると、本種の食草であるクズの繁殖と関係が深いと言われている。クズの繁殖はここ武蔵野では猛威を振るっており、ウラギンシジミはクズに乗って北上して、定着したというのが定説のようである。それと、近年の温度の上昇（特に暖冬現象）もこの蝶の越冬に無関係ではあるまい。それらの好条件があったとしても、この蝶の持つ生命力がなければ、勢力を増大させる事は不可能である。今日、我が家周囲では秋に銀色のシジミチョウが樹木の梢で陽光に輝く姿は秋の風物詩である。昔では考えられなかった光景である。

ウラギンシジミの調査記録

1983-9-23	6♂	吉見町大沼付近
同日	1♂	大宮市奈良町
1988-10-1	1♀	高根cc 目撃 数頭
1990-10-10	3♀	吉見町大沼付近 目撃 数頭
1990-10-14	1♀	上尾市

その他、大宮市周辺での目撃例は多数ある。

その3 ムラサキシジミ

この蝶もウラギンシジミと同様、南国産の蝶である。しかし、厳密に言えばムラサキシジミは照葉樹林帯の蝶である。照葉樹林帯はヒマラヤから西部中国を経由して、日本列島の南東部を縦断していた巨大な樹林帯である。

この照葉樹林帯は櫻、タブノキ、椿等の常緑樹林を主体とした樹林帯で、クヌギ、ナラ等の落葉樹林帯とは完全に生育地域を異にしている。これらの樹林帯は人間生活とも密接に関連するもので、照葉樹林文化という概念も存在する位人間に密接に結び付いているのである。

ムラサキシジミは単に南国の蝶というだけで、前種のウラギンシジミとは基本的に違うのである。

武蔵野の雑木林はクヌギ、ナラを中心とした落葉樹林帯であるが、本来は照葉樹林帯であったとのことである。長い間の人間生活によって、生活に有利な落葉樹林帯に変貌したものが、今日の武蔵野の雑木林であるという。原生林は照林樹林帯であって、今日の雑木林は人間による二次林であるというのが、学者の定説であるらしい。

このような理論で話を進めて行くと、武蔵野の先住人は照葉樹林帯を生活の場としていた蝶達であろうと推定されるのである。ムラサキシジミは武蔵野の先住人であった可能性が高いのである。ムラサキシジミの食樹は桜類である。アラカシ、イチイガシ等が食樹とされている。武蔵野に多いシラカシは本来の食樹ではない。ムラサキシジミが多いのは、やはりアラカシである。

現在、武蔵野ではカシ類は劣勢である。クヌギ、コナラ等の落葉樹が優勢である。従って、武蔵野に

はムラサキシジミは遠い昔に絶滅したと考えられていたよう、織田氏の『武蔵野の蝶』のリストにもムラサキシジミは記載されていない。

1970年代後半か1980年代になって、『タカオゼミ』の神奈川のメンバーが積極的にムラサキシジミの調査を行い、ムラサキシジミは年々個体数を増加させていて、棲息範囲も拡大していると報告していた。神奈川県は暖地で、アラカシも多数自生しているので、ムラサキシジミの増加にはそれほど関心を持たなかった。ところが、埼玉県内の武蔵野の雑木林でもムラサキシジミが増えているとの耳寄りな情報を受けたのである。もとより、わたしは、ムラサキシジミの研究者でも専門家でもない。どちらかといえば無関心派であったが、この情報に心を動かされたのである。

私とムラサキシジミはやはり九州での出会いが強烈に印象に残っている。

ウラギンシジミと同様、九州に転勤して、照葉樹林帯の林にネットを持ってよく出掛けた。カシの枝を叩くと十数頭のムラサキシジミが一斉に飛び出す光景を何度も経験している。九州にはムラサキシジミと親戚のムラサキツバメというやや大型のシジミチョウが棲息している。北部九州ではムラサキツバメの方が遙かに貴重品でムラサキシジミはいわゆる普通種である。誰でも最初はそうだが、貴重品のムラサキツバメを欲しがるのは当然であるが、私の好みからいえば普通種のムラサキシジミの方がかわりなく好きである。この蝶が一叩きで十数頭が一斉にカシの枝から飛び出すのだから幸せ一杯の気分を満喫した楽しい思いであった。

この蝶が武蔵野で増加？しているという情報は私を喜ばせるのに十分であった。

1988年4月1日、吉見の八丁湖で越冬個体を採集したときは嬉しかった。まず越冬個体であるから、ここで完全に棲息している証明であった。ついで、6月に和名沼で破損のひどい個体を採集した。この個体は逃がしてやったが、吉見界隈には棲息している事実を確認したのである。

1990年の狙いは大沼上部の林に絞っていた。最初にコジャノメと対面した林である。ここに数本の良く成育したアラカシが自生していたのを確認していたのである。武蔵野にムラサキシジミが棲息しているのなら、この林に棲息していることは間違いない。過去の経験がそうさせやく。

1990年10月10日、アラカシの枝を叩くと十数頭のムラサキシジミが飛び出したではないか。九州での光景が武蔵野で実現したのである。夢のような光景であった。アラカシは優に数米以上の巨木である。とても私のネットでは無理であったが、下枝に降りて来た蝶をネットにいれて私はすっかり満足した。

11月17日、武蔵森林公园で再びムラサキシジミに出会い、その帰りに大沼の林にいってみた。再び、枝を叩くと十数頭のムラサキシジミが又飛び出した。この日は、ムラサキシジミと一日戯れていたのである。

ムラサキシジミが武蔵野のわずかなカシ類で生活しているにも拘わらず、確かに、個体数は増加しているようだ。これは、最近の温暖化と無関係ではない。武蔵野の昔の住人が温暖化現象によって再び蘇ったと考えるべきであろう。

つい最近、我が蝶友のT君の話では浦和市の秋ヶ瀬公園でもムラサキシジミを目撃したという。ムラサキシジミは確実に武蔵野で勢力を増しているのだ。私にとって嬉しい限りである。

— 12月のムラサキシジミ —

1991年12月、吉見町の八丁湖に妻と散歩でかけた。しかも、この時期にネットを持ってである。実は先週、オオミドリシジミの採卵にきて、湖の畔のアラカシにムラサキシジミが舞っていたのをみたからである。そのときはネットを持っていなかった。数頭のムラサキシジミが冬の日差しを浴びて、気持ち良さげに舞っていたのであった。12月にネットを振ったことがなかったので、その年の最終記録を作ろうと散歩がてらにやってきたのであった。

湖の畔のその場所にきて、アラカシを叩くと十数頭のムラサキシジミが一斉に飛び出した。2頭をネットに入れたが、この時期にネットを振っている姿がやはり異様なのだろう。数人が私の周りに集まってきた。もう採集どころではなかった。見物人に説明するだけで大変だった。12月にネットを振っているのは、どう見ても常人には見えないからだ。しかもここは散歩道だから人がどんどん集まってくる。早々にネットをたたみ私も普通の散歩人に変身して、この場をはなれたのであった。それにしても、ムラサキシジミが越冬を楽しんでいる姿を見て驚くとともに、ムラサキシジミの生活力の凄さをさまざまと見せつけられた思いがした。

ムラサキシジミの調査記録

1989-4-1	1♂	吉見町八丁湖
1989-6-4	1♂	吉見町和名沼
1990-10-10	3♂ 3♀	吉見町大沼付近 目撃 多数
1990-11-17	3♀	同上 目撃 多数
1990-11	1 ex.	目撃 浦和市秋ヶ瀬公園(高島千洋)
1991-12-9	多数(目撃)	吉見町八丁湖
1991-12-16	2♀	同上 目撃 多数

その4 ゴマダラチョウ

この大型のタテハチョウは武蔵野の代表的な蝶の一つである。翅形や生活に類似点をもつオオムラサキが日本の国蝶として、あまりにも有名な為、オオムラサキの陰に隠れて目立たない蝶の印象を受けるが、実に堂々とした蝶で、私の好きな蝶の一つである。

ゴマダラチョウは武蔵野ではオオムラサキと同じ場所で発生するが、棲息範囲はオオムラサキよりはるかに広く武蔵野の雑木林の樹間や梢を飛翔している姿は雄大で王者の貫禄は十分持っている。

ゴマダラチョウにとって悲劇であったのは、武蔵野に更に大形で美麗な蝶—オオムラサキが王者として君臨していたことであった。オオムラサキと比較すると残念ではあるが、すべての面でゴマダラチョウは見劣りする。専門的に見れば、ゴマダラチョウも堂々とした美しい蝶である。しかし、オオムラサキとは残念ながら勝負にはならなかった。結果として、ゴマダラチョウはただの普通種のタテハチョウという格下げに甘んじなければならなかった。

このことはゴマダラチョウにとって、幸いだったのかもしれない。そして、生活力ははるかにオオムラサキを凌ぎ、武蔵野の雑木林の現在の王者にとって代わろうとしている。

今から40年前、武蔵野の雑木林には両種が生存していた。個体数はゴマダラチョウが多かったが、オオムラサキもかなりの個体数を維持していた。従って、当時の武蔵野の王者は文句なくオオムラサキであった。

私の少年時代の1949年～53年にかけて、浦和市の周辺で両種の越冬幼虫の個体数を調査した事がある。勿論、古い事なので正確なデータは持っていないが、浦和市駒場の蓮昌寺の遊園地の榎の大木では、ゴマダラチョウとオオムラサキとの比率は5：1の比率であった。しかし、成虫は圧倒的にゴマダラチョウが多かった。浦和市の駅から7分程度の距離の当時の我が家からわずか15m離れた榎の大木でも5：1程度の比率であった。しかし、そこから10m離れた榎（高さが僅か1m程度）にはゴマダラチョウは来ていたが、オオムラサキの幼虫は見られなかった。

有名な荒川の秋ヶ瀬公園の榎では、ゴマダラチョウはどの榎でもついているが、オオムラサキは特定の榎を選んでいたようである。これは、1978年の調査でも確認している。

つまり、ゴマダラチョウは榎があれば、どこでも生活ができるのに対し、オオムラサキは神経質で榎の種類まで選択していたようで、それだけ生活力は弱いものであったといえよう。果たせるかな、まず、浦和市の町中（当時は結構雑木林があったが）からオオムラサキの姿は消えたが、ゴマダラチョウは現在でも市街地でも生きているのである。

最近、こんなことがあった。私の実家（大宮市三橋の住宅地）に昔、オオムラサキの飼育用として、榎を植えておいた。時がたち、榎の幹も10cm以上に生長したが、枝は毎年、切り落としていたが、ここにゴマダラチョウが住みついたのである。1988年のことである。このように、ゴマダラチョウは市街地でも平気で生活できる蝶である。いわんや、武蔵野の雑木林の生き残った地域では、現在、ゴマダラチョウは我が世の春を謳歌しているかのように、昔と個体数は変わっていないように見える。

この象徴的な光景は市野川の雑木林で現在も見られる。ここでは、現在、オオムラサキの姿は確認していない。昔はこの雑木林にもオオムラサキの姿は見られたはずであるが、現在はゴマダラチョウの天下である。

オオムラサキは『滅びゆく武蔵野の蝶』の代表の蝶であるが、このゴマダラチョウは『逞しく武蔵野に生きる蝶』の代表である。

この極端な対比を明確に説明できる材料は私は持っていないが、同じ生活環境に生きる両種の極端な相違は興味深いものではなかろうか。

ゴマダラチョウは完全に武蔵野の雑木林の蝶であるが、武蔵野の雑木林が消滅してもまだ生き残れる強靭な生活力を持っている蝶だと思う。

この蝶の逞しさに敬意を表して、この項を終わりにしよう。

ゴマダラチョウの調査記録

1988-4

幼虫数頭 目撃

大宮市三橋

1978-5-27	1♂	浦和市秋ヶ瀬
1975-5-9	1♂ (羽化)	同上
1985-9-7	1♀	吉見町市野川
1989-6-4	2♂ 2♀ 目撃 多数	同上

戦前の武蔵野の蝶

『武蔵野の蝶』 織田一磨の世界

織田一磨は明治後半から昭和にかけて、武蔵野を舞台に活躍した画家である。私が注目したのは、画家としてではなく、優れた自然観察者であり、蝶の採集家であったことである。

大宮の図書館で武蔵野に関する本を探していた時、偶然、彼の著書『武蔵野の記録』を発見した。昭和19年に発行された貴重な記録である。早速、家に持ち帰り、むさぼるように読んだものである。

織田氏の言う武蔵野は、東京を中心として、南は多摩川、北は入間川、東は隅田川、西は奥多摩の山麓までの広大な地域を指している。江戸時代は現在の本郷3丁目までが江戸で、それから先の赤門あたりは武蔵野に属していたという。

織田氏が東京在住であったため、埼玉県の武蔵野は無視されているのは、当時の事情からやも得ないが、一般には、山手線の外側の吉祥寺、三鷹、荻窪辺りが中心と考えられていたようである。

この本で非常に興味あるのは、明治時代後半の東京市中の状態である。

当時の東京は雑木林と草原、農家、畠といった状態で蝶の数も多かったらしい。例えば、麻布台から簾笥町にかけて、オオムラサキ、コムラサキ、ツマキチョウ等の蝶が棲息していたという。愛宕山では、オオクワガタ、エゾカタビロオサが採集されたというから、この辺りは雑木林だらけだったのであろう。中野付近ではカタクリが自生していたし、志村ではサクラソウが豊富に自生していた時代である。

昭和になって、これらの雑木林が次々と姿を消し、人家に変貌していく様子が描かれている。この大きなうねりが、20~30年後に、浦和、大宮台地の雑木林に押し寄せてきたのである。

織田氏は昭和10年代の吉祥寺付近を中心に武蔵野平原の蝶を詳しくまとめており、当時の蝶の生活を知ることができる。

ゼフィルス類では、アカ、ウラナミアカ、ミドリシジミ、ミズイロオナガシジミが吉祥寺付近のゼフィルスでウラゴマダラシジミは境（武蔵境？）の柳橋付近の千川の沿岸に行かないと沢山は採集できなかつたらしい。

ヒョウモン類では、ウラギン、オオウラギン、ウラギンスジ、オオウラギンスジヒョウモンの4種を中心で、秋になると、ミドリ、クモガタ、メスグロヒョウモンが加わり、オオウラギンヒョウモンはそれほど珍しい蝶ではなかったようだ。迷蝶としてツマグロヒョウモンが記録されている。

私が1953年、秋ヶ瀬でオオウラギンヒョウモン1♂を採集したのも、この延長線にあったと考えられ、当時としては、大騒ぎする代物ではなかったのである。

アゲハでは、ミヤマカラスアゲハが稀ながら小石川の植物園や渋谷に棲息していたようだ。小石川に

棲息しているとの情報は当時私も知っていた。この蝶は現在でも武蔵野に時々姿を見せるようで、もしかしたら、我が家のカラスザンショウに訪問しないかなと夢みている。オナガアゲハは玉川方面に棲息していたという。この蝶は1952年5月3日、浦和市蓮昌寺の遊園地で1♂採集しているので、現在でも武蔵野に棲息している可能性はある。

ジャノメチョウ科では、クロヒカゲは記載されているが、何故か、コジャノメは欠落している。

シジミチョウ科では、トラフシジミは欠落しているが、オオミドリシジミやクロシジミは記載されている。クロシジミは大宮台地からは姿をけしたが、所沢方面では現在でも棲息しているという（私は確認していないが）

オオミドリシジミは吉祥寺付近では棲息していないとの事であるが、おそらく調査もれであろう。

織田氏のリストには迷蝶も含め、68種が武蔵野には棲息していた。当時の事であるので、調査不足はあろうが、概ね妥当の数字である。埼玉の武蔵野の雑木林との比較では大部分が重複するので、基本的には、織田氏の武蔵野と私の武蔵野の雑木林の蝶の棲息状況は同じと考えてよいと思う。

私の少年時代の浦和市周辺の雑木林は、10~20年前の吉祥寺、荻窪付近の状況と蝶に関しては、それ程の相違がないと考えられるので、私も武蔵野の雑木林の終焉を経験した一人と言えるかもしれない。

尚、織田氏は武蔵野の植物についても詳細に記載されているので、武蔵野の雑木林の歴史を知る上では『武蔵野の記録』は貴重な資料である。

参考までに、武蔵野の昭和19年当時の蝶の織田氏のリストを記載しておく。

織田一磨（1944）による武蔵野蝶類目録

『アゲハチョウ科』

- キアゲハ
- アゲハ
- クロアゲハ
- オナガアゲハ
- カラスアゲハ
- ミヤマカラスアゲハ
- モンキアゲハ
- ジャコウアゲハ
- アオスジアゲハ

『ジャノメチョウ科』

- ヒメウラナミジャノメ
- ジャノメチョウ
- クロヒカゲ
- ヒカゲチョウ
- キマダラヒカゲ（サト）
- ヒメジャノメ

『タテハチョウ科』

- ウラギンヒョウモン
- オオウラギンヒョウモン
- ウラギンスジヒョウモン
- オオウラギンスジヒョウモン
- メスグロヒョウモン
- ミドリヒョウモン

『シロチョウ科』

- モンシロチョウ
- スジグロシロチョウ
- ツマグロキチョウ

キチョウ
ツマキチョウ
モンキチョウ

『マダラチョウ科』

アサギマダラ

『テングチョウ科』

テングチョウ

ツマグロヒョウモン※
クモガタヒョウモン
アカタテハ
ヒメアカタテハ
ヒオドシチョウ
ルリタテハ
キタテハ
コミスジ
オオミスジ
ミスジチョウ
イチモンジチョウ
コムラサキ
オオムラサキ
ゴマダラチョウ

『シジミチョウ科』

オオミドリシジミ
ミドリシジミ
アカシジミ
ウラナミアカシジミ
ミズイロオナガシジミ
ウラゴマダラシジミ
コツバメ
クロシジミ
ウラギンシジミ
ゴイシシジミ
ベニシジミ
ツバメシジミ
ルリシジミ
ヤマトシジミ
ウラナミシジミ

ダイミョウセセリ
ミヤマセセリ
ホソバセセリ
ギンイチモンジセセリ
チャバネセセリ
イチモンジセセリ
コチャバネセセリ
オオチャバネセセリ
ミヤマチャバネセセリ
キマダラセセリ

以上68種

『セセリチョウ科』

※ ツマグロヒョウモンは吉祥寺に稀に棲息すると記載されているが、偶産蝶と思われる。
モンキアゲハもこの当時、武藏野に土着していたか疑問である。
偶産的記録は比較的、近年散見するが、土着とは断定できない。
イチモンジチョウはアサマイチモンジも包含されていると考えられる。

尚、リストの範囲は武藏野平原、新市域から武藏野町、日野辺りまで含む。
従って、オオミスジの棲息は武藏野平原のことなのか疑問がある。

あとがきにかえて今後の問題について

少年時代から今まで、既に40年以上の歳月が過ぎている。その間の世の中の変貌はとても筆舌では表現できない程、急激でドラマチックなものであった。特に、首都圏の周囲を取り巻く武蔵野の雑木林はその影響を直接に受け、殆ど潰滅状態になっているといって過言ではないだろう。

その武蔵野で生活していた蝶達の行く末を考えたのは、ごく最近のことであり、その動機も科学的なものではなく、昔の仲間達がどうしているか単に知りたい。いわば、同窓会に出て、昔の仲間達と話しがしてみたいという単純なものであった。それが、いつの間にか、環境問題にまで発展しそうなテーマとなり、私自身驚いている次第である。

このテーマは1988年から1990年の3年間のデータを基にして書き上げたものである。武蔵野という広大な台地も、昔の浦和、大宮台地から東松山、吉見にかけての狭い範囲の調査に限定し、しかも、武蔵野台地の標高も海拔50m前後以内の地域に絞って調査したのである。

何故、そのように武蔵野を限定して、ある種の『こだわり』を調査のテーマにしたかという問題は、文中でも一部ふれてはいるが、武蔵野の平地林はタイムカプセルに乗って、時計の針を100年以上戻してみた場合、現在、アスファルトジャングルとなっている東京の大都会に昔生活していた蝶——現在は当然絶滅している——が当時の武蔵野の雑木林でどんな生活をしていたか、又どんな種類の蝶が棲息していたか、私自身が知りたかったのである。

現在の武蔵野はすでに有名無実になる程、破壊され潰滅されている。しかし、武蔵野は奥深く広大である。私の探し求めている武蔵野はどこかに存在していると信じていた。例え、それが、武蔵野の残映であっても、そこには私の求めている何かがあるような気がしていた。

それは、単なる私の武蔵野へのロマンに過ぎなかったとしても、それでよかったのである。

この調査を開始してから、本音を言えば、驚きの連続であったし、私の蝶達への無知を思い知らされた連続であつたことを正直に告白せねばならないだろう。

蝶の世界に40年間以上も拘わりを持ち、蝶に関して多少とも自負していた私にとっては、非常にショックであったし、人間の知識がいかに頼りないものであるか思い知らされた3年間でもあった。

確かに、武蔵野の雑木林は衰退し、殆どの場所では潰滅の状態であることは事実である。しかし、そこに生活していた蝶達は私達が想像する程、かよわい存在ではなかったのである。とくに絶滅したと思われた蝶も武蔵野の一角に立派に生活していたし、これからも立派に生き延びて行くだろう。

潰滅状態の武蔵野の雑木林に勢力を増している蝶達も何種類も存在しているのである。

そして、この40年間で武蔵野の雑木林は潰滅しても蝶の種類は個体数は別としても当時と殆ど変わらぬ位生き延びているのである。この驚きは私に自然がいかに奥深く、小さな虫達は想像以上に力強い存在であることを教えてくれたのである。しかし、これが虫達の生活維持の限界であることも確かである。これ以上に破壊が続けば、辛うじて頑張ってきた虫達も絶滅の運命にさらされることは間違いない。これは、調査していく、断言できる事実である。

最近、自然保護が各地で叫ばれ関心が高くなってきた。このことは大変喜ばしいが、人間の側からの自然保護と虫達側からのそれとは根本的に異なるのを人間達は理解しないと無意味な自然保護を論じ演じる羽目に陥る危険性がある。

その最大のものは、放蝶による自然保護である。私は基本的には放蝶は反対である。これは、自然の當みに逆行するものである。虫達の側からの保護のメカニズムが解明されていない状態で、人間達の感傷からか、いたずらに蝶を放してもそれは無意味な行為である。

仮に、どうしても放蝶による保護をやるのであれば、広大な用地を確保して、バタフライファームで増殖させて、毎年、繰り返し蝶を放し、実態を研究してからでないと、全く無意味なことになる。

この問題は意見の異なる人も多いので、もう少し論議しよう。

私は蝶に関しては、ギフチョウ属の類縁関係をもう30年間にわたって研究している。放蝶の王様はギフチョウとオオムラサキである。それが現代では美談として、しばしばマスコミに登場する。そのことにいちいち目くじらを立てる必要はないが、実際には困る問題が発生するのである。

例えば、長野県茅野市のあるヒメギフチョウの棲息地では、1970年代にヒメギフチョウは絶滅したといわれていた。

1980年代前半に蝶友の○氏が、この棲息地から20Km離れた別のヒメギフチョウの棲息地からヒメギフチョウを移住させた。このことは私達は知っていた。従って、長野県茅野市のこの場所のヒメギフチョウは実際はどこの産地のヒメギフチョウであるか承知していたのであるが、1982年から1990年の9年間の調査で、疑問が生じたのである。20Kmはなれた原産地のヒメギフチョウとは初期から顔が若干違うのである。つまり斑紋が原産地の蝶と違うのである。本来なら同じはずであるが、この相違は幾つかの疑問が発生したのである。

その1は茅野市の棲息地のヒメギフチョウが本当に絶滅したかという確認。

その2は茅野市の棲息地のヒメギフチョウは絶滅していなかったという疑問。

その3は現在の茅野市のこの棲息地のヒメギフチョウは一体『何物』なのかという疑問。

純粹の移住者かそれとも生き残りの原住民か。あるいは、両者の混血か。だれもこの問題には解答できないのである。

まだこの問題は原産地とわずか20Km程度の距離だから、大きな問題ではない（個体群の変異としてかもしれないが、完全に、隔離された産地のヒメギフチョウを移住（そういう人は虫屋にはいないが）させてしまったら、これはもう個体群としてはお手上げである。蝶の専門家はそれが常識であるが、そうでない人はこの常識も知らない。蝶が再び戻れば良いと考えているだけかもしれない）のである。これでは専門家からみれば、蝶の形をした化け物に過ぎないを理解しなければならない。

放蝶では現在、多数の問題がある。もう一例あげてみよう。

群馬県赤城山のヒメギフチョウは長い間、幻の蝶として有名であった。ヒメギフチョウの中では、関東唯一の棲息地（実際は他にもあったが）の蝶であり、何よりも美麗な蝶で愛好家の垂涎の的の蝶であったのである。この蝶が姿を消したのは、1960年代の後半で、20年後に復活したのであった。当時、赤城のヒメギフチョウ復活のニュースは蝶の世界に衝撃を与えたのであるが、一部では、放蝶ではないかと

の疑問も出された。私もその話を直接聞いたことがあるが、幸い私は赤城のヒメギフチョウは調査、完了していたので、斑紋の特徴から、間違いなく赤城のヒメギフチョウであることを確認していたが、このように、放蝶の噂が混乱を招いてしまう恰好の例であろう。

自然はあるがままが良い。それが蝶達にとって、例え厳しい条件でもあるがままが最も望ましいものである。その条件の中で彼等は生存競争を行っているのである。いたずらに人間の感傷で保護の名目で放蝶はやるべきでないというのが私の持論である。

市野川のウラゴマダラシジミが誰かの放蝶だったとしたら、私の味わった幸福感はたちどころに茶番劇に転落してしまう。放蝶は一般的に言っても害はあっても益はない。いたずらに人心を惑わすだけのものである。

放蝶に限らず、自然保護は虫の世界では難しいものである。何故かといえば、蝶達は人間の生活の営みに密接に関連しているのである。人間の営みによって種を維持してきたものが、営みを放棄して、自然のあるがままの状態にしたら絶滅の危機にさらされた蝶は特に草原性の蝶に数多く見られるのである。

武蔵野の雑木林も元来は照葉樹林であったのが、人間の営みによって、落葉樹林に変貌したと言われている。蝶もそれらの環境の変化に適応して、今日の種類になったのであろう。それを再び元にもどす必要はないのだ。例え、幾つかの蝶が絶滅しても自然はあるがままでよい。但し、破壊して、蝶達の生活が不可能にするのは論外である。

武蔵野は破壊されてはいるが、まだ奥深く、そこに生活している蝶もまだ安泰とまでいかなくても絶滅の危機には達していない。

この3年間の調査での私の実感である。蝶達は私達が想像するよりはるかにしづといものである。しかし、乱獲はその地域の蝶を確実に絶滅に追い込むことは間違いない。そのことを私達は心に銘記しなければならないだろう。

このレポートで全く触れなかった幾つかの気になる蝶達がいる。それは、この3年間の私の調査で追跡できなかった蝶達である。これらの蝶達の安否は今後の私への課題である。ただ、今回は私自身の調査データのみでの記録であり、文献上のデータによる考察は一切割愛したが、無視したわけではない。私自身の記録と感傷での文体に終始しているので、割愛せざるを得なかったのである。

近い将来、これらの蝶を中心とした続編を出せることを私自身願っている。

又、川越から所沢にかけての平地林の調査もこれからの課題であるので、今後は積極的にこれらの地域を歩いてみようと考えている。武蔵野の違った一面が新たに発見されるかもしれない。

1991年1月13日 記

(いしづか よしのり 〒331 大宮市奈良町 136-51-4-203)

.....

埼玉県行田市の直翅類

内田正吉

.....

バッタやコオロギ、キリギリスなど直翅類は大型のものや発音するものが多いため目につきやすい（耳にしやすい）グループであるにもかかわらず、埼玉県においては調査が成されていない地域が多く、県内のどこにどんな種が生息しているのか各種の分布状況を把握できる段階には至っていない。

県北に位置する行田市周辺もそのような地域の一つであろうと思われる。筆者は1991年2月から1992年3月までの1年間、行田市内に住んだため、同市の直翅類を20種ほど確認することができた。一方、1992年10月4日に同市埼玉にある埼玉古墳群において自然観察会が開催され、筆者も参加させていただく機会に恵まれた。その前日（10月3日）にも同地を訪れ、この2日間の観察によっても比較的多くの直翅類を確認することができた。以上の経緯によって現在筆者が確認している行田市の直翅類について、ここに報告したい。

なおヒシバッタ類については、既に内田（1992）に報告しているのでその後の追加分のみを報告する。

ゴキブリ目 BLATTARIA

チャバネゴキブリ科 BLATTELLIDAE

1. チャバネゴキブリ *Blattella germanica*

矢場, 1.VIII.1991, アパートの室内にいた1頭を採集する。

カマキリ目 MANTODEA

カマキリ科 MANTIDAE

2. コカマキリ *Statilia maculata*

矢場, 28.IX.1991, アパートに接した草地にて1頭を目撃する。

埼玉古墳群, 3.X.1992, 1頭採集。

埼玉古墳群, 4.X.1992, 目撃。

3. オオカマキリ *Tenodera aridifolia*

中央, 9.V.1991, 朝7時40分（曇り、無風）、忍川の岸のフェンスに産みつけられている2個の卵のうちの1個から、幼虫が孵化している最中であった。

中央, 21.V.1991, 朝7時30分（晴～薄曇り）、同じく忍川のフェンスに産みつけられているもう1個の卵のうちから、5月21日と同様に孵化している最中であった。

埼玉古墳群, 3.X.1992, メス1頭を目撃する。

埼玉古墳群, 4.X.1992, 雜木林の林縁のササの茂みの中でメス1頭が産卵中のところが観察された。

直翅目 ORTHOPTERA

キリギリス科 TETTIGINIIDAE

4. ツユムシ *Phaneroptera falcata*

中央, 30.VI.1991. オス1頭採集する。

埼玉古墳群, 3.X.1992, オス1頭目撃する。

5. セスジツユムシ *Ducetia japonica*

矢場, 24.IX.1991, 夜8時30分頃, アスファルト舗装の路上でオス1頭が鳴いていた。(ばったりぎすNo.93に報告)

矢場, 5.IX.1991, 夜8時30分頃, アスファルト舗装の路上でオス1頭が鳴いていた。

(ばったりぎすNo.93に報告)

埼玉古墳群, 4.X.1992, 目撃。

6. ウマオイの一種 *Hexacentrus* sp.

埼玉古墳群, 4.X.1992, メス数頭を目撃する。オスは1頭も見られなかつたので、ハヤシノウマオイかハタケノウマオイか同定できなかつた。まわりの環境(樹木が多く、近くにはまとまつた雑木林がある)から察すると、ハヤシノウマオイである可能性が強い。

7. クビキリギス *Euconocephalus thunbergi*

中央～矢場, 9.IV.1991～26.VI.1991, 毎日通う道沿いで本種の発音する期間について調べてみた。鳴き初めは4月9日で、6月下旬まで鳴き声を聞くことができた。発音する時刻は夕方6時30分あたりから夜間にかけてである。筆者が確認した最も遅い時間は夜11時ころ(6月26日)である。発音する個体数は毎日同じなわけではなく、たくさんの個体が一斉に鳴いている日もあれば、1頭も鳴かない日もあった。発音する個体数は気温や湿度などの気象条件に左右されるものと思われる。ちなみに5月8日には夕方に雨が降って、雨上がりの夜に多数の個体が発音していた。また、4月16日の朝7時40分に2個体ほどの鳴き声を聞いている。今までの観察から、夕方から夜間にかけてだけでなく、比較的気温の低い朝には4月16日の例のように少數ながら発音する傾向があるようだ。

この期間で目撃できた個体は8個体で、すべてオスであり、緑色型が5頭、褐色型が3頭であった。鳴いている位置は様々で、アスファルト舗装の路上(ばったりぎすNo.93に報告)・住宅のブロック塀の上部(歩行しながら発音していた)・忍川岸の草むら・低木の上部(高さ1.5m程度)などであった。

中央, 22.II.1992, 市街地の人通りの多い路上で、赤紫色型のメス1頭がつぶされていた。採集する。

埼玉古墳群, 3.X.1992, 幼虫(メス; 緑色型)1頭目撃する。

8. ウスイロササキリ *Conocephalus chinensis*

中央, 19. IX. 1991, 忍川岸の草むらで数個体が鳴いていた。オス1頭を採集する。

埼玉古墳群, 3. X. 1992, 鳴き声聞く。芝生に生えているイネ科植物で数個体が鳴いていた。

9. ササキリ *C. metas*

埼玉古墳群, 4. X. 1992, 鳴き声を聞く。

10. ヒメギス *Metrioptera hime*

中央, 18. VII. 1991, 夜7時30分頃, 市街地の中の住宅の壁面にメス1頭(長翅型)が静止していた。

採集し, 飼育する。この個体は飼育により10月中旬までの約3ヵ月間生存した。

カマドウマ科 RHAPHIDOPHORIDAE

11. カマドウマ *Diestrammena apicalis*

中央, 19. XI. 1991, 朝7時頃, 市街地の路上で1頭を発見(蟻死体)。

矢場, 12. XII. 1991, 朝, 住宅地に接した路上にメス1頭がいるのを発見する。体の一部が欠損していた。採集する。

これら2例のカマドウマはともに初冬の朝の路上という不自然な時期と場所で見出された。おそらく住宅の中に生息していたものが、前日の夜にそれぞれの家人に発見されてつぶされ、家の前の道路に捨てられたものと推測される。

コオロギ科 GRYLLIDAE

12. ツヅレサセコオロギ *Velarifictorus micado*

中央, 3. X. 1991, 朝6時30分頃, 忍川沿いのアスファルト舗装の路上にいたオス1頭を採集する。

矢場, 27. IX. 1991, 夜10時過ぎに鳴き声を聞く。

矢場, 28. IX. 1991, 朝5時頃, 草むらなどで鳴いていた。

13. タンボコオロギ *Modicogryllus siamensis*

皿尾, 19. V. 1991, 夜8時頃, 水田地帯でかなり多数の個体が発音していた。

中央, 31. VIII. 1991, 夜8時30分頃, 忍川沿いの空地の地表でオス1頭が鳴いていた。採集する。

14. クマコオロギ *Mitius minor*

埼玉, 3. X. 1992, 埼玉古墳群に接した水田(湿田)でオス2頭, メス1頭を採集する。よく湿った土の中で、「リッ・リッ・・・」とも「ディッ・ディッ・・・」とも聞き取れる声で鳴いていた。鳴き声のする盛り上がった部分の土塊をひっくり返して, 上記個体を採集した。

15. タンボオカメコオロギ *Loxoblemmus aomoriensis*

埼玉古墳群, 3. X. 1992, オス1頭採集する。

16. ミツカドコオロギ *L. doenitzii*

矢場, 28. IX. 1991, 朝5時頃, 草むらなどで鳴いていた。
埼玉古墳群, 4. X. 1992, 数頭目撃する。

17. エンマコオロギ *Teleogryllus emma*

谷郷, 25. VII. 1991, 夜8時30分頃, 忍川の付近でオス1頭が鳴いていた。
中央, 5. IX. 1991, 夜9時頃, 市街地のあたりに土や草地がまったくない舗装された駐車場でメス1頭目撃する。
中央, 14. IX. 1991, 夜7時30分頃, 行田市駅付近の広い草地で数個体が鳴いていた。
矢場, 27. IX. 1991, 夜10時過ぎに鳴き声を聞く。
矢場, 28. IX. 1991, 朝5時頃, 草むらなどで鳴いていた。
埼玉古墳群, 3-4. X. 1992, 数頭目撃する。

18. アオマツムシ *Truljalia hibinonis*

中央, 14. IX. 1991, 夜7時30分頃, 行田市駅付近の樹上でさかんに鳴いていた。
矢場, 27. IX. 1991, 夜10時過ぎに鳴き声を聞く。
埼玉古墳群, 3-4. X. 1992, 両日とも日中に鳴き声を聞く。

19. カンタン *Oecanthus longicauda*

中央, 14. IX. 1991, 夜7時30分頃, 行田市駅付近の広い草地でオス1頭が鳴いていた。

20. クサヒバリ *Paratrigonidium bifasciatum*

埼玉古墳群, 4. X. 1992, 鳴き声を聞く。

21. キンヒバリ *Anaxiphia* sp.

矢場, 25. VI. 1991, 夕方6時頃, 忍川の岸の草むらで鳴いていた。

22. ヤマトヒバリ *Homoeoxiphia lycoides*

埼玉古墳群, 4. X. 1992, 雑木林の下草でメス1頭を目撃する。

23. マダラスズ *Dianemobius nigrofascatus*

埼玉古墳群, 3-4. X. 1992, 数個体目撃する。

24. カワラスズ *D. furumagensis*

中央, 25. VII. 1991, 夜8時30分頃, 行田市駅付近の線路の砂利で鳴いていた。

25. ヒゲジロスズ *Polionemobius flabvoantennalis*
埼玉古墳群, 3.X.1992, 鳴き声を聞く。個体数は少なくない。

26. シバスズ *P. micado*
埼玉古墳群, 3.X.1992, メス1頭採集する。

カネタタキ科 MOGPLISTIDAE

27. カネタタキ *Ornebius kanetataki*
矢場, 27.IX.1991, 夜10時過ぎに鳴き声を聞く。
埼玉古墳群, 3.X.1992, 植え込みの低木で鳴いていた。

ノミバッタ科 TRIDACTYLIDAE

28. ノミバッタ *Xya japonicus*
埼玉古墳群, 4.X.1992, 数頭目撃する。

オンブバッタ科 PYRGOMORPHIDAE

29. オンブバッタ *Atractomorpha lata*
矢場, 28.IX.1991, 午後3時10分頃, 住宅地の中のアスファルト舗装の路上にオスが1頭いるのを目撃する。
埼玉古墳群, 3.X.1992, 数個体目撃する。

イナゴ科 CATANTOPIDAE

30. コバネイナゴ *Oxya yezoensis*
中央, 1992年秋, 忍川の岸の草むらで目撃する。

バッタ科 ACRIDIDAE

31. ショウリヨウバッタ *Acrida cinerea antennata*
埼玉古墳群, 3.X.1992, オス1頭を目撃する。

32. トノサマバッタ *Locusta migratoria*
皿尾, 15.VI.1991, 忍川の岸でメス1頭を採集する。

ヒシバッタ科 TETRIGIDAE

33. ハネナガヒシバッタ *Euparatettix insularis*
矢場, 30.XI.1991, メス1頭採集する。
埼玉古墳群, 3.X.1992, 1頭を採集する。

34. ハラヒシバッタ *Tetrix japonica*

埼玉古墳群, 3.X.1992, メス1頭を採集する。

埼玉古墳群, 4.X.1992, 数頭目撃する。

以上、筆者が確認している直翅類はゴキブリ・カマキリを含めて34種である。内田(1992)に報告したトゲヒシバッタを加えると35種である。そのほとんどが人為的影響の強い環境にも生息する種(クビキリギス・アオマツムシ・エンマコオロギ・マダラスズ・カマドウマ・ハラヒシバッタなど)であるか、湿地に生息する種(キンヒバリ・タンボコオロギ・タンボオカメコオロギ・クマコオロギ・コバネイナゴ・トゲヒシバッタなど)である。このことは、一面起伏のない平坦地に住宅地や水田が広がっている行田市の環境をよく示していると言えよう。また、埼玉古墳群にササキリやクサヒバリ・ヤマトヒバリが生息しているのは、雑木林が比較的良好に保たれていることのあらわれであろうと考えられる。

今後調査がすすめば、行田市からは最低でも10種は追加されるものと思われる。クサキリやヤブキリ・ハラオカメコオロギ・クルマバッタモドキ・イボバッタなど当然生息しているであろう普通種をまだ確認していないからである。そして北部を流れる利根川の川原からは、ヨシ群落に生息していて本県未記録であるオオクサキリやカスミササキリなどが発見される可能性がある。

一方、以前は普通に生息していたが、現在は消え去ったと考えられる種がいる。クツワムシがそれである。10月3日の観察会に地元から参加した1人は「クツワムシは昔は沢山いたんだけどね。夜店に壳りにも出ていたりしたんですよ。でも今はまったくいなくなっちゃいましたね。」などと話してくれた。

参考文献

内田正吉(1992) アスファルトの路上で発音するクビキリギス、ばったりぎす(93): 4.

内田正吉(1992) アスファルト舗装の路上でセスジツユムシ鳴く、ばったりぎす(93): 7.

内田正吉(1992) 埼玉県におけるヒシバッタ類、昆虫と自然 27(2): 21-25.

(うちだ まさよし 〒369-12 大里郡寄居町桜沢 1505)

【訂正】

寄せ蛾記No. 66 p. 1438-1439 牧林功(1993) オオホソオドリバエ♀の群飛について

上記報文中、p. 1438の下から4行目

(誤) 埼玉県からは初記録である。	(正) 埼玉県からもすでに記録されている。
----------------------	--------------------------

本種は、すでに埼玉県からも記録されていることがわかりましたので、上記のとおり訂正します。

(訂正: 牧林 功)

・・・・・

嵐山のビオトープはビオトープか？

巣瀬司

・・・・・

新聞記事を読んで

1993年1月15日の埼玉新聞に「嵐山・蝶の里公園・4月オープンを目指して・建設工事急ピッチ・県内最大のビオトープに」というタイトルの記事が掲載された。内容は「樹木や草地の自然環境を整え、蝶やバッタなどが生息できる空間、いわゆる“ビオトープ構想”に取り組んでいる嵐山町が4月オープンを目指して工事を進めている。完成すると、県内最大のビオトープ公園になる（原文のまま）」というもので、「比企丘陵は森や林など豊かな自然環境に囲まれており、特に国の史跡に指定されている菅谷館跡付近には広大な雑木林が残され、国蝶オオムラサキが生息していることなどから、同町では昭和58年、自然とのふれあいを取り戻し、潤いのある地域社会を形成していくこうと、ビオトープ構想を打ち出した（原文のまま）」と記してある。

この記事を読んで、「それは良いことではないか」という感想を持たれた方も多いと思う。さらに、記事の最後には「嵐山町の豊かな自然環境を守り、人間と生き物が共生できる自然環境をつくることで、県民に憩いの場を提供したい（原文のまま）」という同町のコメントも添えられている。

筆者はこの記事を読んで、その内容には根本的な間違いがあるように思えた。それは「自然環境」をビオトープという名のもとに「つくる」という発想である。そもそも、豊かな自然環境はそのまま残すべきであり、その豊かな自然を整備することは、何を意味するのだろうか？ それはビオトープという名を借りた「開発そのもの」ではないのか。

最初の引用文の「自然環境を整え、蝶やバッタなどが生息できる空間・・・」という部分も問題である。都市や砂漠ならともかく、それなりの自然が残っている環境に手を加えて、何が「ビオトープ」なのか。

「人間と生き物が共生できる自然環境」が大切であり、必要であることは十分にわかるが、それを前面に出し、「開発」を正当化することには、反発せざるをえない。もちろん、その開発が「遊歩道を作り、里山であれば、20年に一度の林の更新（伐採）を行い、年1回か2回の下草刈りを行う」という非開発的な開発、従来通りの里山に対する人間の適切な干渉であれば、大賛成なのだが。

ビオトープと自然の創造について

そもそもビオトープという発想は、どこから生まれたのだろうか？ それは旧西ドイツやスウェーデンに起源があるらしい。これらの国は約2万年前のウルム氷期に氷河に覆われた地域であり、以前筆者が訪れたカナダのバンクーバー近辺と同様、植生は極めて単純であるらしい。単純な植生に人間の手が

入り過ぎた北欧の自然と、氷河に覆われたことのない、温暖で湿潤な日本の自然を同列に扱うことには問題がある。もし、ビオトープ化する前の「蝶の里公園」とビオトープ化した後の「蝶の里公園」をドイツ人やスウェーデン人が見たら、何と言うだろうか？

自然は、人間が創造するものではない。復元はある程度、あくまでもある程度、可能かもしれないが、自然は自然であって、人為的に造るべきものでも、造り出せるものでもない。我々ができることは、人為的な自然（里山など）は従来通り人為的な自然として、手つかずの自然は、できるだけ手つかずのまま残すことであり、完全に自然が破壊された場所にだけは、できる限りその地の自然の復元を試みる、ということだけであると思う。決して、自然は創造すべきものではない。どうしても自然を創造したい人は、自宅の庭に自然を創造すれば良い。もっとも、その庭に自然が創造できた時、誰がその庭を「自然」と見なすであろうか。

嵐山のビオトープはビオトープか？

本誌 No. 64 : 1355-1362に碓井徹氏が書いておられる内容を筆者は全面的に支持する。筆者のつたない文章で繰り返し同じことを書く気にはなれないが、筆者も現実の「ビオトープ」の多くは「新規事業としての自然風味の人工環境作り」のように思えてならない。

「ビオトープ」が「これまでの開発で自然環境が失われてしまった地域や環境に対して、自然環境を復元するための事業を行い、潤いのある自然環境を創造すること」であるなら、筆者も大賛成である。従って、大宮駅操車場跡地にビオトープを造ることには、諸手を上げて賛成する。

「ビオトープ」が真に自然保護のためのものならば、既存の自然環境の保全が優先されなければならない。豊かな自然を改変（改悪）して、何が「ビオトープ」なのか。

もし、上記の新聞記事に「ビオトープ」の文字がなかったら、筆者は、この蝶の里公園の建設を、何も言わず温かく見守ったかもしれない。嵐山には、この事業に関係しておられる本会の会員もあり、「嵐山・蝶の里公園」に対して、本当は、それほど「めくじらを立てる」必要がないことは、わかっているつもりである。ではなぜ、このような批判的な文章を書いたのか。それは、ビオトープとは、とても思えない「嵐山・蝶の里公園」をビオトープと位置づけるその姿勢に反発を覚えたからである。今回の嵐山の例をそのまま認めてしまうと、豊かな自然を勝手に改変（改悪）しておいて、「これは、より多くの生き物が棲むことが可能となるための環境、つまりビオトープを造るための環境改良です」というゴマカシの理論で、開発が正当化される前例となってしまう可能性が極めて高いと思えたのである。

自然保護は難しい。あらゆる意味で難しい。ただ一つ言えることは、ゴマカシは良くない。

最後に一言、「嵐山・蝶の里公園」は決してビオトープではないし、ビオトープであってはならないと筆者は思う。

（すのせ つかさ 県337 浦和市寺山 806）

.....

詩にあらわれた蝶（4）

荒木 崇

* * * VII * * *

「C. W. 伯の遺稿より」 第二部、11

R. M. リルケ

蝶よ、おまえがその架け橋をしてくれる幸福、
わたしのと自然のと、自然のとわたしのと、
わたしたちの幸福——おまえが果樹の垣のところを
軽やかに 見取り図を描くように 飛んでゆくとき。

こうした未来の一部であるには
いまはまだ わたしが不当であるように思われた。
孤りぼっちで重いわたしたちの心、その心が わたしたちを
怪しんでいるのを おまえは信じないのだから。

けれどいま おまえは わたしの眼差しの糸を
四月の織物に織り込んだのだった。そして
もしわたしが 機織りのところにつくのをしぶるなら
わたしは楽しい壁掛けを傷つけてしまうことだろう。

(塚越敏 訳)

「ラガツの墓地にて」 I

R. M. リルケ

墓地の堀ごしに

風に吹き流されてきた蝶、
 悲しみの花々の蜜を飲む。
 すると花はますます豊かさを増すらしく……

蝶、いにえになった花は
 ますます思案を深めるから
 蝶はその花の咲くという行ないを
 あらゆる庭の絶対的な努力に編みこむ。

(神品芳夫 訳)

「C. W. 伯の遺稿から」は1921年の春に、ベルクの館でリルケの前に現われた亡靈が口述したものと写しとったものとして、書かれた連作詩である。第一部が10編、第二部は11編の詩から成っている。

さて、この詩では、蝶を介して自然と芸術の関係が詩われている。蝶はこのふたつの間にあって「架け橋」となるかに見える。しかし、いまだ自然と合一しない「私の心」－芸術－と、すでに自然と合一している「蝶」と。「私」はまだ熟さず、機を織るにいたっていないのに、「蝶」はそんな私の眼差しの糸を織り込んでしまった。自然の幸福と自分の幸福とを一致させることのできない自分にしてみれば、それは作品を傷つけることしかないと。

次の詩は、1924年7月初、ラガツで書かれた9編の詩から成る「ラガツの墓地にて」の中の一編である。この詩については神品芳夫氏の次の言葉を引くことにしよう（「リルケ研究」）。

「蝶のうたのように見えるけれども、この詩の中心にあるのは墓地の花々である。それは死者の国の土壤から咲きだしているのだと詩人は感じているのである。蝶は告知者のような役割で登場しているが、この軽やかな蝶のイメージが作品に奥行きをあたえている。蝶から花を通して死の世界へという目にはみえない一筋の道が読む者的心にあざやかに浮かびあがる。」

さて、蝶の詩もここまでくると、何やら蝶の影を追ううちに、ミューズの森の奥深く迷いこんでしまったような感がある。次は少し趣きを変えて、やさしいものを採ることとしよう。

* * * VIII * * *

今度は、立原道造という詩人の詩を2編採ることにしよう。立原は、太平洋戦争の直前に二十代半ばで逝った天逝の詩人である。軽井沢追分けの地を愛し、そこに取材した詩も多い。

はじめてのものに

立原 道造

ささやかな地異は そのかたみに
 灰を降らした この村に ひとしきり
 灰はかなしい追憶のやうに 音立てて
 樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきった

その夜 月は明かったが 私はひとつ
 窓に凭れて語りあった （その窓からは山の姿が見えた）
 部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と
 よくひびく笑ひ声が溢れてゐた

——人の心を知ることは…… 人の心とは……
 私は そのひとが蛾を追ふ手つきを あれは蛾を
 把へようとするのだらうか 何かいぶかしかった

いかな日にみねに灰の煙の立ち始めたか
 火の山の物語と……また幾夜さかは 果して夢に
 その夜習ったエリーザベトの物語を織った

(「わすれぐさ
萱草に寄す」所収)

立原は三冊の詩集を残したが、これはその最初の詩集の巻頭の一編である。

ひとり林に

立原道造

山のみねのいただきのぎざぎざの上に
 あるのは 青く淡い色 あれは空……
 空のかげに かがやく日 空のおくに
 ながれる雲…… 私はおもふ 空のあちらを

夏の日に咲いてみた 百合の花も ゆふすげも
 薊の花も かたい雪の底に かくれてゐる
 みどりの草も いまはなく 梢の影が
 菓色のこまかい線を 編んでゐる

ふと過ぎる…… あれは頬白 あれは鶴！
 透いた林のあちらには 山のみねのぎざぎざが
 ながめてゐる 私を 私たちを 村を——

すべてに 休みがある ふかい息をつきながら
 耳からとほく 風と風とが ささやきかはしてゐる
 ——ああ この真白い野に 蝶を飛ばせよ！……

(生前の詩集には未収録)

彼の早すぎた晩年の詩である。

立原の読者は多く、小さな断片にいたるまで収録した立派すぎる全集まで出ている。しかし私は思うのだが、彼のような詩人の場合、ほんとうに完成された詩（百編あまり）のみをあつめて瀟洒な一冊の詩集にまとめる方がどんなにか似つかわしかろう。彼は一編の詩を時として徹底的に推敲したし、詩の並べ方にさえ、細かな配慮をはらう人であったから。

私には彼の詩のいくつか、例えば、「のちのおもひに」とか「夏の弔ひ」とか、あるいは、「また落葉林で」や「晚秋」をひどく愛した時期があった。そうしたもののがいくつかはいまだ忘れられることなく心の隅に残っているが、今となってはそれは、もう懐かしい昔の話しのような気がする。

(あらき たかし 〒399 長野県松本市寿台 2-4-23)

キタテハの小観察

上原市郎

1992年7月27日、千葉県野田市東金野井の湿地脇斜面の草地で、キタテハの交尾前行動と思われる場面を観察したので報告する。

観察できたのは、比較的大きなカナムグラの葉上で、15:27～19:11。上下左右には影になるようなものではなく、開けた空間であった。最後に飛び立って見失うまで、同じ一葉から移動しなかった。発見した時には♂が♀の右側後方をウロついていた。♂は擦れた個体で、♀の方は大型で新鮮な個体。♂は腹部を時計まわりに180° 折り曲げて♀の腹部先端に近づけるが、♀は腹部を上下動したり、両後翅で♂の腹部先端を叩くような行動をとった。♂は暫く静止してから反対側の左後方へ移動して同様の行動をとったり、再度右側に移って同じような行動を繰り返した。この間の♂は前屈みにして触角をダランと下げ気味で歩行した。それはちょうど叱られた子供がうなだれているようでもあり、カマキリの場合ほどではないものの、♀にかなり気をつかっているようで、キタテハの♂もつらいものだなア、という印象。

これらの行動は、右側で5回、左側で2回を数えた。また、♀が翅を小刻みに震わせるのを何回か見ている。♂が♀の下半身より前方に移動するのは見ていない。行動しているより静止していることが多い、静止している場合には、頭部を同じ方向にして、♂が♀の下半身の右側後方に並んで寄り添うようにしていた。19:05を過ぎると、視界が効かなくなってきたので、バッテリーライトの光を向けると、その瞬間に♀に♂がぶら下がって飛び立ち、暗闇に消えた。観察できただけで3時間半を越えていたが、交尾は成立していなかったようなので、♂が♀に掴まっていたのだろうか？

以上は交尾拒否行動のようだが、観察の間は♀は飛んで逃げるようなこともなく、動いたのを見たのは、腹部と後翅の上下動に翅の微動、それに触角の動きぐらいで、歩行での移動は目撃していない（触角の動きの細かいことは不明）。斜め後方だけから見ていたせいか、♀は根が生えているように堂々として見えた。

この日は大変な酷暑で、特に9:00～15:00頃の気温はすごく、ほぼ無風だった。ここの湿地にはアオヤンマが割合普通なので、ネアカヨシヤンマを期待して出向いた。ネアカヨシヤンマの出現に注意しながらの観察であって（結局ネアカヨシヤンマは現れず）、1箇所に佇んで凝視していたわけではなく、見落としたこともあると思われる。これらがキタテハの交尾前の平均的な行動パターンなのだろうか？

キタテハの交尾前行動を見たのは初めてなので、知見をお持ちの方はご教示ください。

（うえはら いちろう 県343 越谷市花田 1-19-2）

ゴマダラカミキリの飼育記録

石 藏 拓

ゴマダラカミキリの成虫が越年し、2月17日までの約8ヶ月生きていたので、比較的長期の飼育例として報告します。

飼育個体は、1992年6月27日朝8時頃、埼玉県浦和市秋が瀬公園のヤナギの枝にとまっているところを採集した。カミキリの飼育体験がないので、生態観察の目的で飼育を始めた。野外ではカビに侵されたカミキリの死骸をよく見ていたので、カミキリはカビに弱いのでは?と判断して、風通しの良い虫かごで飼育した。虫かごには土や腐葉土は入れずヤナギやイチジクの小枝と水をビンのキャップ(直径約3cm)に入れて与えた。

キャンプ場の炊事場などでカミキリをよく見かけていたので、直接カミキリに霧吹きで水を与えたところキーーと鳴いて喜んで(?)いたように思えた。それから時々入浴時に虫かごを持って行き、風呂場で虫かごの掃除も兼ねてシャワーをかけてやった。エサは小枝以外にカボチャ、乾燥させたみかんの皮、バナナの皮、リンゴの皮などを与えた。虫かごの下に敷いた植木鉢用受け皿がエサのクズでいっぱいになった。

冬は虫かごの中にみかんの皮を幾重に重ねた。夜はその皮の中に身を隠すようになり、寒さを防ぐのにお逃げのカバーといった感じだった。死因は定かではないが、不注意で水を与え過ぎて虫かごの回りを湿らせたままにしたことが原因かもしれない。

長生きしたと思われるポイント: ◎ 常に新鮮な水を与えるように心がけた。◎ カビに弱いので風通しの良い虫かごで飼育した。◎ 真冬でも室温が16度以下にならなかった。◎ 直射日光に当てなかった。◎ 虫かご近くに観葉植物(大型の樹木)を3本置いた。

証明のためビデオカメラに新聞日付とともに録画した。同じ頃採集し飼育中のハナムグリ、ゾウムシ、ゴミムシ類はまだ健在なのでまた機会があれば報告したいと思う。

(いしくら ひらき 〒114 東京都北区滝の川 6-36-5)

大滝村小倉沢でムモンアカシジミを採集

石 塚 正 彦

埼玉県内でのムモンアカシジミは、これまでに大滝村川又、栃木、三峰山の三ヶ所が知られているが、筆者は大滝村小倉沢で昨夏、本種を採集しているので報告する。又この時コキマダラセセリも採集しているので報告する。

8月16日は3頭のムモンアカシジミを目撃し、そのうちの1頭を採集、8月22日は8頭目撃し、そのうちの3頭を採集した。時間帯はいずれも12時~14時の間で、筆者が過去に採集観察している大滝村川又同様に、この時間帯が最も活発に活動していた。又16、22日とも天気は晴れであった。

ムモンアカシジミ	4♀♀	1992年8月16, 22日	秩父郡大滝村小倉沢	筆者採集保管
コキマダラセセリ	2♂♂	1992年8月16日	秩父郡大滝村小倉沢	筆者採集保管

(いしづか まさひこ 〒368 秩父市上町 1-1-7)

秩父市浦山 大平山での蝶の採集記録

石 塚 正 彦

少々古い記録ではあるが、筆者は秩父市内の浦山天目山林道の大平山付近で以下の蝶を採集しているので報告する。

採集個体:	アイノミドリシジミ	3♂♂
	メスアカミドリシジミ	3♂♂
	ツマジロウラジャノメ	1♀

採集地：秩父市浦山 天目山林道 大平山付近

採集日：1981年7月18日

採集者：石塚 正彦（標本保管）

(いしづか まさひこ 県368 秩父市上町 1-1-7)

■■■■■ 浦和市大谷口でミドリヒョウモンを目撃 ■■■■■

中川 利勝

筆者は、浦和市大谷口の明花公園において、ミドリヒョウモンを目撃しているので報告する。データは以下の通り。

1♂ 浦和市大谷口 27. IX. 1992

当時は、風の強い晴天の午後であった。目撲個体は、強風下にもかかわらず、公園内に植えこまれているハナゾノツクバネウツギ（アベリア）の花に、吸蜜のために訪花飛来した♂である。

現在、浦和市内では、人為的なものを除けば、偶産を含め本種が発生している可能性はなく、目撲個体は、主に秋期に平野部に飛来してくる個体の一例と考えられる。

(なかがわ としかつ 県335 蕨市北町 1-13-10)

■■■■■ 北本市石戸宿でモンキアゲハを目撲 ■■■■■

中川 利勝

筆者は、北本市石戸宿の北里メディカルセンターにおいて、モンキアゲハを目撲しているので報告する。データは以下の通り。

1 ex. (目撲) 北本市石戸宿 22. VIII. 1992

南方系のモンキアゲハについては、近年、県内でも目撲例が多くなってきており、筆者も、大宮台地に位置する北本市石戸宿において、夏型の個体を目撲しているので報告する。

(なかがわ としかつ 県335 蕨市北町 1-13-10)

寄せ蛾記 67号 目次

石塚 祺法：武藏野の雑木林の衰退と蝶の変遷（5）	1457
内田 正吉：埼玉県行田市の直翅類	1470
：訂正1件	1475
巣瀬 司：嵐山のビオトープはビオトープか？	1476
荒木 崇：詩にあらわれた蝶（4）	1478
上原 市郎：キタテハの小観察	1482
石藏 拓：ゴマダラカミキリの飼育記録	1483
石塚 正彦：大滝村小倉沢でムモンアカシジミを採集	1483
石塚 正彦：秩父市浦山 大平山での蝶の採集記録	1483
中川 利勝：浦和市大谷口でミドリヒョウモンを目撃	1484
中川 利勝：北本市石戸宿でモンキアゲハを目撃	1484
会報	1484
編集後記	1484